

イギリスの日本文学・文化研究

吉 田 幹 生

稿者は、2010年4月から2011年3月までの1年間、ロンドン大学東洋アフリカ学院 (the School of Oriental and African Studies、以下 SOAS と略す) で学外研修に従事する機会を得た。本稿では、稿者の1年間の研修体験をもとに、稿者が SOAS 及びその周辺で体験した日本文学及び日本文化研究のあり方を報告するとともに、日英の日本研究が抱える問題点についても指摘したいと思う。

一

言うまでもなく、SOAS は日本研究の世界的な拠点であり、日本のみならず世界各地から研究者がやってきて講演会やシンポジウムが開かれている。稿者が滞在した 2010 年度も、語学や宗教・美術史など様々な分野の講演会が (学期中は) 毎週のように開かれていたし、SOAS 主催ではなかったと記憶しているが、近隣の大英博物館では Donald Keene 氏の講演会も開催されていた。日本では考えられないような豪華な研究環境である。稿者もそれらの講演会のいくつかに参加してみたが、日本とは異なった切り口やテーマ設定のものが多く、非常に刺激的な経験をする事ができた。

そのような貴重な体験をする過程で、日本では考えられないような場面に出くわすこともしばしばであった。たとえば、稿者も 2010 年 5 月に「和歌について」と題して研究発表を行ったが、その際、中世文学の研究者から天皇制や無常観に関連する質問を受けた。稿者の発表は古代和歌の表現構造に関するものであり、特に天皇制や無常観との関連を意識したものではなかった。もちろん、質問は自由になされて何の問題もないのではあるが、発表者としては、専門の近い中世文学研究者なら当然共有していると思っていた基本的な学説への理解を欠いた質問という印象であった。

一度そのような感想を抱いてしまうと、どことなく彼らの質問がよく言えば学際的、悪く言えば大雑把な気がしてきてしまう。前述したように講演会のテーマは多彩であり、稿者自身がその全てに精通しているわけでは、もちろんない。それゆえ、その一つ一つの質問について、それがどの程度専門的なのかはまったく判断できないのだが、多少なりとも稿者の研究領域に近いところと言えば、古代日本の宗教について考えるのに、インドとの関連に言及するのはあまりに巨視的という印

象であるし、また反対に『御堂関白記』の記述を問題にする際に、それが自筆本であるか否かを問わないのは論の厳密性にかかわるような気がしてしまう。もっとも、「日本研究」という点で共通はしていても、専門の必ずしも一致しない研究者が参加する講演会である以上、ある程度質問が概括的になることは致し方ない。また、講演会やシンポジウムの内容がそのままイギリスでの日本文学・文化研究の水準を反映していると捉えては事を単純化しすぎることになるのも、言うまでもない。しかしながら、稿者の感じた違和感は、日本とイギリスの研究姿勢に関するある重要な違いに根差しているのではないか、という直感を拭いがたい。

二

文学研究においては、言葉がすべてという側面が確かに存在する。作品の解釈を一言一句ゆるがせにしないというのは、少なくとも日本における日本文学研究の初歩の初歩であり、そういう基礎を固めた上で論を展開していくという雰囲気や暗黙の了解事項として現に存在していると稿者は考えている。おそらく、歴史研究なら歴史研究、語学研究なら語学研究、というように特定の分野ごとにそういったディシプリンは存在するはずである。稿者の感じた違和感は、おそらくこの点に由来しているのであろう。積み上げていくべき論証過程に、微妙な差異が存在しているようなのである。

しかし、イギリスの研究者に前述したディシプリンが欠如しているわけではない。SOASの教員の多くは学生時代に日本への留学経験があり、修士号等の学位を日本で取得した研究者も少なくない。また、教員になってからもたびたび日本に研究や調査等で訪れており、日本の研究動向からまったく疎外されているわけでもないのである。むしろ日本の研究手法をある程度知った上で、それとは異なるスタイルを採用していると考えべきなのであろう。では、それは何故なのか。

すぐに思い浮かぶ理由は、研究教育環境の問題である。たとえば、成蹊大学では日本文学科に6人の文学担当教員がおり、それぞれ古代・中世・近世・近現代の範囲を受け持っている。それゆえ、古代文学が専門の稿者は基本的に、日本文学に関心のある学生を対象に古代文学だけを講じていれば事足りることになる。しかし、SOASの場合は、必ずしも文学に限らず「日本」に関心のある学生を対象に講義をしなければいけない。また、古典文学担当の専任教員は1人だけなので、前近代(pre-modern)を1人で担わざるを得ない。SOASにおいてさえそのような環境なのであるから(学部レベルで日本の古典文学が学べるイギリスの大学はSOASを含めて4校しかないらしい)、他の研究機関に所属する研究者が、日本での場合のように、自分の研究領域のみを対象にしているわけにいかないことは想像に難くない。また、受講する学生も、特に古典文学の場合などは、それを専門に研究するというよりは興味があるので履修するというような事情であろうから、あまり専門的な内容を話すことが躊躇われるというようなこともあろう。それゆえ、日本の大学のようなやり方を踏襲していたのでは、イギリスの現状にそぐわないということが考えられる。いきおい、概括的・通史的な発想に傾きやすい、ということになる。

しかし、イギリスで日本的な研究が行われていない理由は、日本と同じような環境にないという消極的な理由だけではないように感じる。稿者はSOAS滞在中にそのあたりの事情を十分に解明することができなかったが、イギリスで研究する場合には、むしろ意図的に日本的な研究手法が回避されているようなのである。このことは、イギリスにはイギリスの日本文学・文化研究が発達しているということの意味していよう。

たとえば、稿者が渡英した直後の2010年4月には春画についてのワークショップが開催されていた。これは2009年にスタートした3年間の研究プロジェクトの一環で、SOASのみならず日本を含む国内外から研究者を招いて行われる予定であった。残念ながら、直前に起きたアイスランドの火山噴火の影響で規模の縮小を余儀なくされたが、このようなワークショップが企画されることじたい、イギリスにおける日本研究の一つの関心の在処を示すものであろう。稿者は今回のワークショップの中心人物でもあるアンドリュー・ガーストル(Andrew Gerstle)氏と後に話をする機会を得たが、史料調査の時のことや春画研究の抱える問題点など様々な興味深い話を聞くことができた。稿者がわけても興味深く感じたのは、性に対する日本の閉鎖性についての指摘であった。一般に今日の日本では性の解放がかなり進んでいるように感じられるが、春画研究を通して日本と関わってこられたガーストル氏にとっては、まだまだこの点で日本での調査研究に困難がつきまとうのだという。逆の見方をすれば、ガーストル氏の春画へのアプローチは、日本人的感性からはやや異質なものを含んでいるということになる。SOASには、春画の大胆な定義で話題になった『春画』の著者でもあるタイモン・スクリーチ(Timon Screech)氏も所属していることを思うと、門外漢の稿者ゆえの的外れな印象かもしれないが、SOASを中心とする海外での春画研究は、日本の春画研究の延長線上に誕生したものではなく、むしろ彼ら独自の興味関心から発達して来たものと評すべきもののように感じる。日本的手法に縛られないからこそ新たな発見や提言が可能になったのであり、それが、今や日本の研究者にも大きな刺激を与えているということなのであろう。

あるいは、この春画研究ほどの成果はまだ出ていないのかもしれないが、日本の宗教研究も盛んに行われているようである。稿者が参加した講演会でも、日本では聞いたことのない文献について発表がなされており、質疑応答も盛んであった。発表者は日本留学を終えたばかりの大学院生であったので、日本での研究状況も十分に踏まえてのものであったかと推測するが、稿者にとっては、やはり独自の切り口や視点を持った発表という印象であった。海外から眺めるからこそ、日本人とは異なった関心や問題意識が芽生えてくるということなのであろう。

三

19世紀の明治維新を契機とする西洋化の波が、日本に大きな影響を及ぼしたことは言うまでもない。それは、政治体制や国民生活のみならず、学問の分野にも及んだ。激動の転換期を生きた研究者や文化人たちは、西洋に学び、それを日本に根付かせようと試みた。稿者のかかわる文学研究

の分野で言えば、当時東京帝国大学の助教授であった芳賀矢一が日本文学研究の体系化を目指して、官命を帯びてドイツ留学し（1900～02年）かの地でドイツ文献学を学んだことなどが、よく知られている。以来、マルキシズムに依拠する歴史社会学や20世紀後半に流行したテキスト論から近年のカルチュラル・スタディーズに至るまで、絶えず西洋からは新しい理論が紹介され続けている。それにより、日本文学研究には常に新しい知見がもたらされてきたが、しかしながら、日本の文学研究が西洋的な手法一色に染め上げられるというような事態には未だ至っていない。西洋に学びながらも西洋化しない現実が、確かに存在しているのである。

おそらく、それと似たような事情がイギリスにも存在するのではないか。彼らは、日本的な研究方法や日本の研究状況を学びはする。しかしそれは、我々が西洋の理論を学ぶようなものであって、あくまで一つの技術ないしは数あるアプローチの中の一つというくらいの意識であるように思う。やや乱暴に言ってよければ、おそらくイギリスにも、日本の文学や文化が紹介されていた時期はあったであろうし、初期の日本研究は日本人による研究に学ぶところから開始されたのではあろう。しかし、たとえばアーサー・ウェイリー（Arther Waley）によって『源氏物語』が英訳出版されたのは1921～33年であり、それから100年近い歳月が経とうとしている。その間、イギリスの日本研究は着実に進展してきており、もはやそういった初期の段階からは抜け出している。そして、彼らなりのやり方や問題意識に基づいて、日本文学や日本文化が研究される段階が始まっているのである。

とするならば、我々日本の研究者はどのように彼らと接していけばよいのであろうか。稿者の漠然とした印象だが、これまでの（研究者に限らず）日本人の対応はおよそ次のようなものではなかったか。一つ目は、外国人に日本のことなど分かるわけがないとして頭から否定する、ないしは懐疑的に見るパターン。二つ目は反対に、外国人による日本研究というだけで歓迎する、ないしは積極的に日本の紹介役を務めようとするパターン。さすがに研究者に前者のような対応をする人は少ないだろうが、後者もまた、日本のことは日本人の方がよく知っているという意識を前提としている点で同類と言わねばなるまい。

もちろん、日本在住の研究者が資料の閲覧等で海外の研究者より有利であることは間違いない。また、日本語を母語とするの方が日本語の微妙なニュアンスを汲み取りやすいというのも疑い得ないであろう。それゆえ、書誌的な資料調査や（文学研究の場合であれば）正確な本文解釈という面で、日本人研究者が海外の研究者に対して情報を提供する側に立つことは否定できない。しかし、だからといって、全ての面において日本人研究者が優れていると考えてしまえば、自ら交流の機会を失うことになる。本稿冒頭にも述べたように、イギリスの（あるいは海外の）日本文学・文化研究には違和感を感じることも多い。しかしそれは、彼らの研究が日本の水準に達していないからでは決してなく、そこに日本とは異なる独自の研究が進展しているからと考えるべきであろう。

それゆえ問題は、日本の研究がそのような海外の研究とどのように関わっていけるのか、ということになる。もし前述のような現状が続けば、世界の（少なくとも欧米の）日本文学・文化研究と

の距離はますます大きくなってしまいかねない。日本は日本で独自路線を歩むというのも一つの見識かもしれないが、同じものを研究対象としていながら研究者間で会話が通じないという事態は、やはり好ましいものではない。そこで最後に、外国人研究者との交流を深めていくために必要だと思われる点を二点指摘しておきたい。

四

一つ目は、海外に向けての発信力を強化することである。稿者が滞在中にも、中国や韓国の研究者は英語で論文を書くのに、日本の研究者はほとんどそれをしないと指摘されたことがある。SOASの図書館には数多くの日本語文献が所蔵されているが、稿者の見たところ、よく読まれた形跡があったのは村上春樹の小説くらいで、あとは綺麗な状態で陳列されているといった方が相応しい状況であった。反対に、日本に関する英語文献は日本語文献の十分の一にも遠く及ばないくらいの量しかなかったと記憶している。言うまでもなく、イギリスの初学者はそれらの英語文献を読むところから日本研究を開始するのであろうから、日英の研究者が共通の基盤に立って議論ができるようになるためには、この段階から日本の研究書が読める環境を整えていくことが重要であろう。しかしながら、日本の研究者が英語で論文や著書を発表することは、現状では事実上困難である。そこで、せめて日本で基本的文献とされているような入門書や学術書だけでも英訳していくということが必要なのではないか。日本語が堪能にならないと先行研究が参照できないという状況は、イギリス側にとっても好ましいものではあるまい。稿者は研究書の翻訳事情に疎いのだが、良書の英訳出版を推進する努力はもっと積極的になされてよいように思う。

また確かに、現状では日本人研究者による英語論文の発表は困難であるものの、海外の目を多少なりとも気にしながら論文を書くことは必要であろう。これは、海外の研究動向を踏まえる、ということではない。日本で研究が進展すると、どうしても研究対象は細分化していつてしまう。その結果、当該分野に習熟した特定の研究者集団を対象にして論文を書くということになりやすい。それが一概に悪いとは言えないが、海外の研究者に限らず専門家以外の研究者にとって、議論の内容が分かりにくいというのは問題である。小さなことを問題にしても、それを解決することによってどういう展望が拓けるのか、当該分野の研究全体にとってその議論がどういう意義を持つのか、といったことを常に念頭に置きながら論文を書くという姿勢は重要であろう。実は、ロンドン滞在中に、日本の研究者は確かにものをよく知っているが書くものはつまらない、というような言葉を耳にしたことがある。具体的にどのようなものを指しての発言なのかは不明だが、それが狭い分野に閉じこもってしまっているという意味であるとすれば、我々にも反省すべき点はある。誰に対しても分かりやすい議論を心がけることは、たとえそれが日本語で書かれた論文であったとしても、結果として海外に日本の研究を発信していくことに繋がっていくはずである。

二つ目は、海外の研究に対する違和感を大切にすることである。稿者自身の反省を含めて言えば、

海外の研究者に対すると変な遠慮が働いてしまい、なかなか日本人研究者に対するようには物が言えないことが多い。それゆえ、多少疑問に感じることもあったとしてもそのまま有耶無耶にしていまいがちである。しかし、この段階で留まっていたのでは相互理解は覚束ない。疑問に感じた点は率直に伝えることが、互いの距離を近づけることになる。稿者自身の体験になるが、日本の神仏習合をめぐるワークショップが2011年2月にSOASで開催された。神仏習合という概念で日本の現象を捉えてよいのかという問題提起など、稿者には勉強になることの多いものであったが、それだけにまた疑問点も多く、その日は思い切って質問してみることにした。ことが微妙な概念に関わるだけに十全に理解できたとはまでは言えないが、発表者がどうしてそういう考え方をするのか、また稿者に何故それが飲み込み難かったのか、ということは明らかにできたと感じた。一言で言ってしまうと、ヨーロッパにおける類似の現象との比較や類推が発表者の側にはあり、その知識を欠く稿者はそれゆえ躓いたということなのだが、そういうことは一歩踏み込んで質問しないとなかなか分からないことだと思う。海外の研究者は、必ずしも日本人研究者と同じような手順を踏んで研究対象にアプローチするわけではない。また、彼らには彼ら固有の問題意識も存在している。それゆえ、研究論文を読んだり研究発表を聞いたりするだけでは、十分に相手の考えを汲み取れないことも多いに違いない。そういう場合には、違和感を大切に、可能であれば質問するなどしてその解消に努めてみるのが有効であると思う。そうすることで、お互いが自明視している基本的な論の枠組み等に気づくこともあるのではないか。

上に述べたことは何も外国人研究者との交流のみに限られる事柄ではないが、自分の考えを正確に伝える・相手の主張を正しく汲み取るという当然のことが重要であると考えている。日本文学・文化研究の分野でも「国際化」が叫ばれて久しいが、それが外国人研究者を交えたシンポジウムの開催や国際学会への参加といった表面的なイベントに終わらないためにも、今一度コミュニケーションの原点に立ち返ることが必要であろう。

*本稿は、2010年度成蹊大学長期研修テーマ「ヨーロッパにおける日本文学・文化研究について」の研究成果の一部である。